

A photograph of three people standing in front of a lush green orange tree. On the left is a woman with dark hair wearing a light pink patterned turtleneck and tan pants. In the center is a man with dark hair wearing a red and white checkered shirt and dark blue pants. On the right is an older man with white hair wearing a tan and black plaid shirt and grey checkered pants. They are standing on a stone path next to a green pipe. The background is filled with green leaves and several ripe orange fruits.

新・農業経営者ルポ／第167回

二宮尊徳の訓えが息づく 農村の経営者

「報徳社」という組織をご存じだろうか。二宮尊徳の訓えを伝え、実践するため、1875年に静岡県掛川市で設立され、いまでは全国各地に住民主体で運営する支部が存在する。今回の主人公は、その支部の一つである杉山報徳社（静岡市清水区）の青木悟だ。柑橘を中心に経営する一方で、その利益を社会に還元する取り組みをしている。 文・撮影／窪田新之助、写真提供／青木農園

2018年3月某日、筆者は東京農業大学（以下、農大）が神奈川県厚木市にあるキャンパスで開催したシンポジウムを傍聴していた。その内容は本稿とは関係がないのでさておくとして、シンポジウムの最中に印象的だった出来事がある。それは、登壇者の教員が農大による東日本大震災の復興の支援を振り返ったときのことだ。農大のPTAに当たる教育後援会の会長としてそれに携わったということで、突如、筆者の横に座っていたOBの名前を呼んだ。その男性が住んでいる静岡市清水区杉山には「ホウトクシャ」が存在することに触れたうえで、復興の支援に向かうバスの中で彼が語ったということな逸話を紹介した。

「あれは往きのバスの中だったか。『我が家は1000万円のもうけがあれば生活できる。でもそれだけでは駄目で、1200万円の目標を持って農作物をつくっている。1200万円もうけたうち、200万円は社会に役立てよう。それがホウトクの訓えだ』と」

仕事柄多くの農業経営者に会ってきたが、社会に寄付することを前提に売上目標を決めていると聞くのは初めてだったため、新鮮な驚きを受けた。「ホウトクシャ」とは「報徳社」だろうが、いったいどんな活動をしているのか。気になって仕方がない。そこでシンポジウムが終わった後、横の男性にすぐさま声をかけた。それが青木だった。そして、遠からぬうちに杉山で会う約束をした。

燃料革命で柑橘とタケノコ、茶へ転換

しばらくして訪ねた杉山は、静岡市清水区の清水いはらインターチェンジから車で数分の山間の集落だった。集落を縫って走る川は、前夜からの大雨で水かさが増し、濁流と化している。それを横目に奥へ走っていくと、途中で外壁に「報徳社」と書かれた二階建ての建物を見つけた。さらに行くくと小高い場所に旧校舎を残したままの夜間学校の跡地があり、道沿いには薪を背負いながら読書する二宮金治郎像が立っている。

車から降りて煙っている山を見渡すと、柑橘園と竹林、茶畑が点在していることを確認できた。

やがて到着した青木家の玄関脇では、青木がちょうどタケノコを塩漬けしている最中だった。ゆでたのかなり大きなタケノコを縦に真っ二つに切り、それを重ねて樽に入れ、重しを載せるという作業を繰り返していた。

代々農家の青木家は立派な日本邸だ。家の目前にある高台の墓所には、ちよつと見たことがないほど大きな墓石が鎮座している。聞けば、この地で400年以上続く旧名主だという。家の歴史はおそらくもっと古いそうだが、過去帳を預かってしまった寺が400年前に焼けてしまった。それ以上さかのぼる手立てがない。居間に入ると先祖夫婦の写真が飾られており、この家を建てた11代目の平右衛門から始まっていた。現在は青木の父である14代目の文次郎（86）が家主である。

農家としての経営面積は7haと、果樹を中心とした経営ではかなり大きい。このうち6.5haは柑橘類で、50aは茶葉。ほかに山林でタケノコを育てるほか、畑の畦や山の斜面を使ってフキが生える環境も整えている。そうした農産物で加工品も作る。杉山では各農家の品目構成はフキを



青木農園

青木 悟

静岡県静岡市

1957年、静岡県清水市（現・静岡市清水区）杉山生まれ。東京農業大学農学部農学科卒業後、家業に入る。同大教育後援会学校法人東京農業大学連合後援会会長（現在は顧問）などを歴任。

除けばおおむね同じで、青木は「これには歴史があるんだよ」と語る。

江戸時代にこの山間の集落は毒荏どくえんの栽培で栄えた。これはトウダイグサ科の落葉高木で、別名はアブラギリ。その名の通り種子から油が取れ、灯火に用いられた。ただ、いま地区に残る毒荏はわずか1本。先に触れた二宮金治郎像のそばに立っている記念樹だけである。なぜなら、明治時代に入って石油燃料が普及したためだ。

「毒荏の実が売れなくなって、この地区は大変困窮したんですね。それを救ったのがミカンでした。片平信明が和歌山からミカンの苗木を導入し、この地に広めていったんです」

名主の片平は毒荏の油問屋だった。そして、1877年（明治9年）に杉山報徳社を設立し、村人に人の和を説き、一致団結して貧窮から脱することをけん引していった。ミカンと合わせ、商品作物として茶とタケノコも普及する。

「村人たちは日当たりのいい場所にミカンを、冷気のためる沢筋や風が吹き抜ける山の頂に茶を、傾斜地には竹を植えていった。ここは山間地ですから、土地の利用と労力の分配を踏まえて効率的な品目の配分を考えたんです」

そう語る青木が運転する軽トラッ

クで山を登り、当時の名残を見せてもらった。山の頂近くで車から降り、木々がうっそうと生い茂った斜面に目を凝らすと、薄暗い中に苔が付いた石垣の姿を確認できる。まさに天に届くまで開墾していったわけだ。

報徳思想を受けた村の復興

その石垣を眺めながら、青木は「これこそ報徳思想なんです」という。報徳思想とは、江戸時代後期の経世家、農政家である二宮尊徳の経済と道徳に関する訓え。その思想は「至誠・勤勞・分度・推讓」という報徳四訓に代表される。至誠とは、自他ともに誠実を貫くことで、報徳思想の根本である。勤勞とは至誠

の状態で日常生活に励むことと同時に、知恵を働かせて労働を合理化し、社会に役立つ成果を生み出すこと。分度とは勤勞により一定の余剰を残しながら生活すること。推讓とはその余剰を他者に譲ること。

杉山報徳社を設立した片山は、自宅納屋の2階で夜学校を開き、青年



杉山地区の中心地に今も残る杉山青年夜学校。入口には二宮金治郎像が立つ。

たちに報徳思想を広めていった。青木は語る。

「それまではばくちなんかする人がいて、稼いでも生活が潤わなかった。金の使い方が駄目だと豊かになれない。そうではなく、一生懸命真面目に誠実に働いていこうと。みんなで頑張る、村を挙げて豊かになること

を片平は説いていったんです」

青年たちは日々その訓えを支えとして将来に期待しながら、山を切り開いて開墾し、柑橘を植えていった。機械もない時代のその苦勞は想像に余りある。そのかいあって、杉山では昭和の初期にもなると、農家の年商が現在の貨幣価値で4000万円



上：トラクターを改造して農薬が散布できるようにした。中：フルクローラー式の小型ダンプ。狙った箇所にも農薬を散布する。下：山から切り出した木。

報徳四訓で大事なものはバランス

報徳四訓に関して、青木は個人が生きるうえでそれぞれのバランスが取れていることが大事だという。「至誠、勤労、分度、推譲の四つのバランスを取ることが大切。いずれが多すぎても、いずれが不足しても

レーヤーではなく、フルクローラー式の小型ダンプ。荷台に薬液タンクを載せ、そこから運転席にチューブを

ほどに達したという。杉山報徳社の活動は、住民からの会費に加え、事業収入でまかなってきた。山林を買い取り、木を伐採して薪にし、それを売って基金を設けた。畑を大きくしたり、子どもを大学に出したりなど、大金が入用な人がいれば、返済能力を審査したうえで、そこから金を貸した。ほかに道の舗装や共同で使う農業資材の購入に当てている。

駄目。これは自分の行動を映し出す鏡にもなっていて、物事がうまくいかないときはだいたいどれかが欠けている」では、青木は報徳四訓に基づきどんな仕事や活動をしているのか。至誠に関しては全体に通じていることなので、勤労から始めていく。農業経営では造成事業でできた畑のうち約4haを取得し、4年前に柑橘を植えた。園内道を整備し、機械による効率化を進めている。

青木の資源の有効活用には敏感で、たとえば除草剤の散布機は知人から譲り受けた中古のトラクターを

持ってきて、ハンドル式の噴霧器を外に向けてワイヤーで吊り下げる。園内道を直進しながら、片方の手に噴霧器を握って果樹に薬液を散布していく。散布するのが樹の外部か内部かで噴霧圧を変える。樹と樹の間も間雲に薬液を散布してしまいうづムスプレーヤーと違い、この方式なら狙った樹だけを狙い撃ちにできるので農薬の節減になる。

青木は資源の有効活用には敏感で、たとえば除草剤の散布機は知人から譲り受けた中古のトラクターを

ん尿や高速道路ののり面の雑草などからつくったものだ。造成した園地では他の農家を含め一斉に同じ品種を植えたが、青木の園地だけですぐに実を着けていた。

条件不利地では付加価値を追求

一方で傾斜がきつい園地では、効率化とは別のスタイルの農業を展開している。代表的なのはタケノコ。一般には足の裏で踏んでわかる程度の小さなタケノコが好まれるが、青木によれば、大人の腰丈くらいまで生長したほうが柔らかくておいしいという。ただし、食べるのは柔らかくない上半分だけ。

「この大きさと市場には出荷できないけど、個人に直接販売したり、学校給食に卸したりしている。学校給食はサイズが大きいほうが調理には使いやすい。お客さんには好評だね」

独自の価値を打ち出すという点では、樹齢120年になる甘夏の樹を残している。傾斜がきつく作業がしにくいうえ、果実は酸味がきついで伐採するはずだった。それが樹が立派なので残すことにした。何とか商品化できないか。思いついたのは、その果実でマーメイドを作ることだった。もちろん、樹齢100年を超えることをうたっている。

この樹の周囲にはフキが生えてい



青木農園の竹林。竹はこのくらい大きく育ったものの上部のほうが柔らかくておいしいという。収穫したタケノコは専用の釜ですぐにゆでて塩漬けにする。

る。というか青木の畑や園地では空いた場所ならどこにでもフキが生えている。もともとフキが生えているところにはあえて除草剤をまかない。収穫して佃煮として売るためだ。全品目の販売量の3割は農協出荷で、残り7割は個人客への直接販売

である。かつてはすべて農協に出荷していたが、1970年代にミカンが暴落した経験から、リスク分散を図るようになった。まずはポンカンを商品化。さらに「ほかに何かないの」と聞かれることが増え、茶葉やフキも直接販売するようになった。

要は青木家のファンが増えていったのだ。まさに「勤労」と「分度」の成果である。続けて「推奨」について。青木が軽トラックで最後に案内してくれたのは、富士山が眼前にある大峰山の頂にある茶畑。その端にある1枚は

二宮尊徳の訓えが息づく農村の経営者



樹齢120年の甘夏の樹とその実を加工したマーマレード。



茶の定植、収穫風景とタケノコの加工。
茶は販売するほか、過去には被災地に支援物資として送ったこともある。

社会に還元するための畑だ。

息子の文優が農大の野球部に所属していたときには、ここで収穫した茶葉は自費で製茶して、部員の飲料用にすべて寄付した。東日本大震災が起きてからは被災地の支援に回した。

当時の青木は農大のPTA会長。PTAの復興支援の事業の一つとして、杉山の農家から提供してもらったのはミカン。農大生は仮設住宅を1戸ずつ回って、そのミカンと一緒に被災者の気持ちに寄り添う手紙を手渡した。また、地区の祭に使っていた竹灯籠を自治会より提供しても

らい、農大生と被災者が一緒にキャンドルナイトとして灯した。報徳思想が息づいているため、青木はもちろん、各戸とも当然といったように自分で育てた農産物を無償で提供する。それらをまとめ、青木は何度も被災地に持っていった。

農大や農林大学の学生を研修生として随時受け入れているのも推薦の一環だ。自宅の敷地内に隠居を改装した宿泊施設を用意、そこで研修生と一緒に生活する。学生が来るきっかけは教員からの依頼が少なくない。他人と意思疎通が取れない、

授業に出席しないなどの問題を抱える学生も預かる。

たとえば、ある学生は農大の教員からの依頼で前年も研修を受け入れた。昼夜逆転の生活を直すのが目的で、研修中は克服したかに見えたが、研修後はやはり元に戻ってしまっただけだ。だから、再度チャレンジしたいというのだ。二度も受け入れるなんていかにも優しいようだが、そこは厳しく接するのが青木だ。「先生から電話で直接依頼が来たときに、その子から僕に電話をよこしてほしいと言ったんです。どうい

つもりで来るのか、いつから来るのか、僕に直接電話をかけるようにと。自分の口で説明しなきゃ駄目ですよ」

こうやって受け入れた学生は150人に及ぶ。青木にとっては労力としてもちろん助かる。ただ、それだけではない。

「学生がうちの暮らしと仕事を通して、変わるきっかけをつかんでくれることがある。それがうれしい」
学生が研修後に送ってくる感謝の手紙は青木の宝になっている。

(文中敬称略)